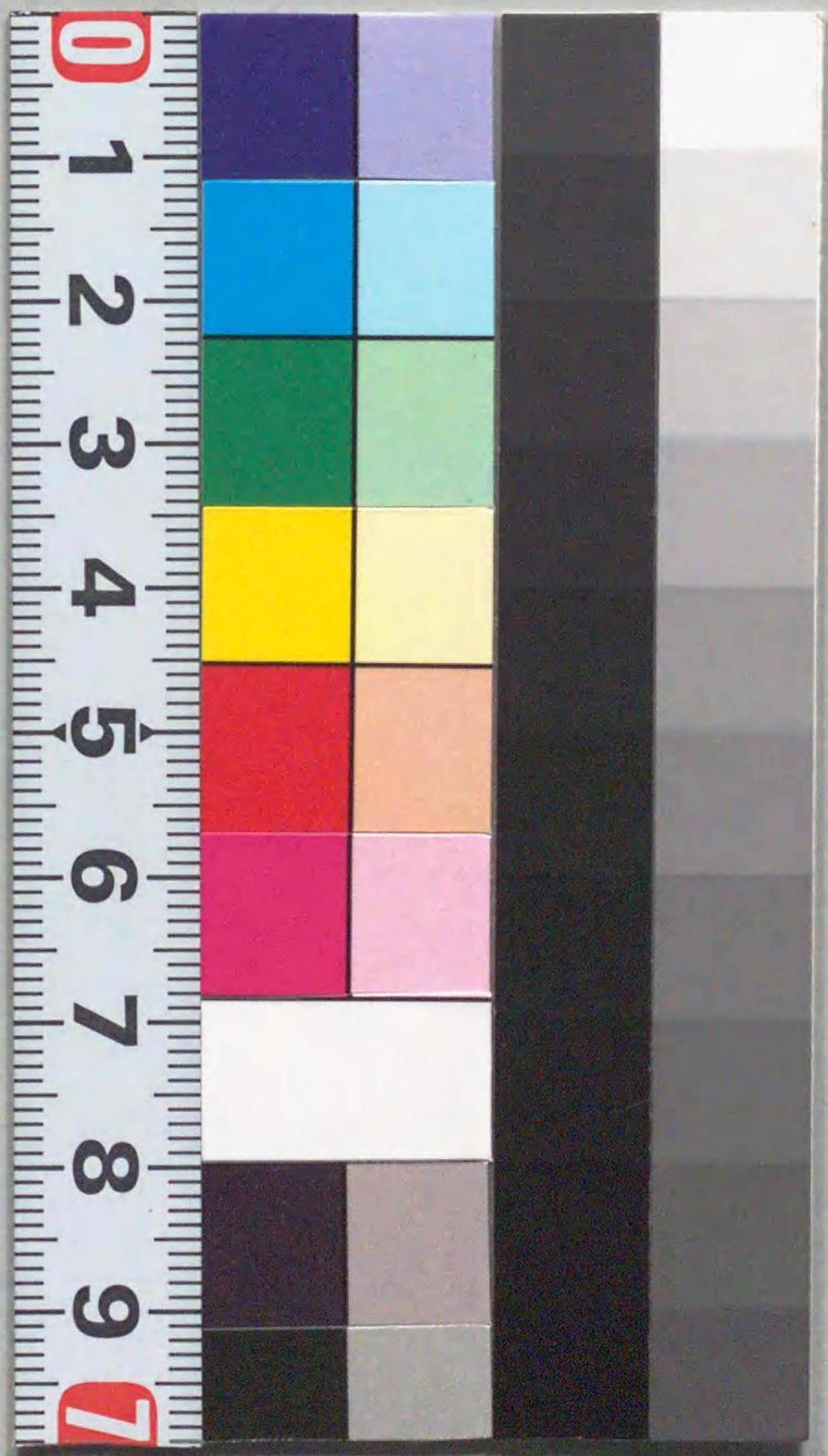


古鈔本節用集解說

8
Se
轉





813
Se216
1740-3



247250

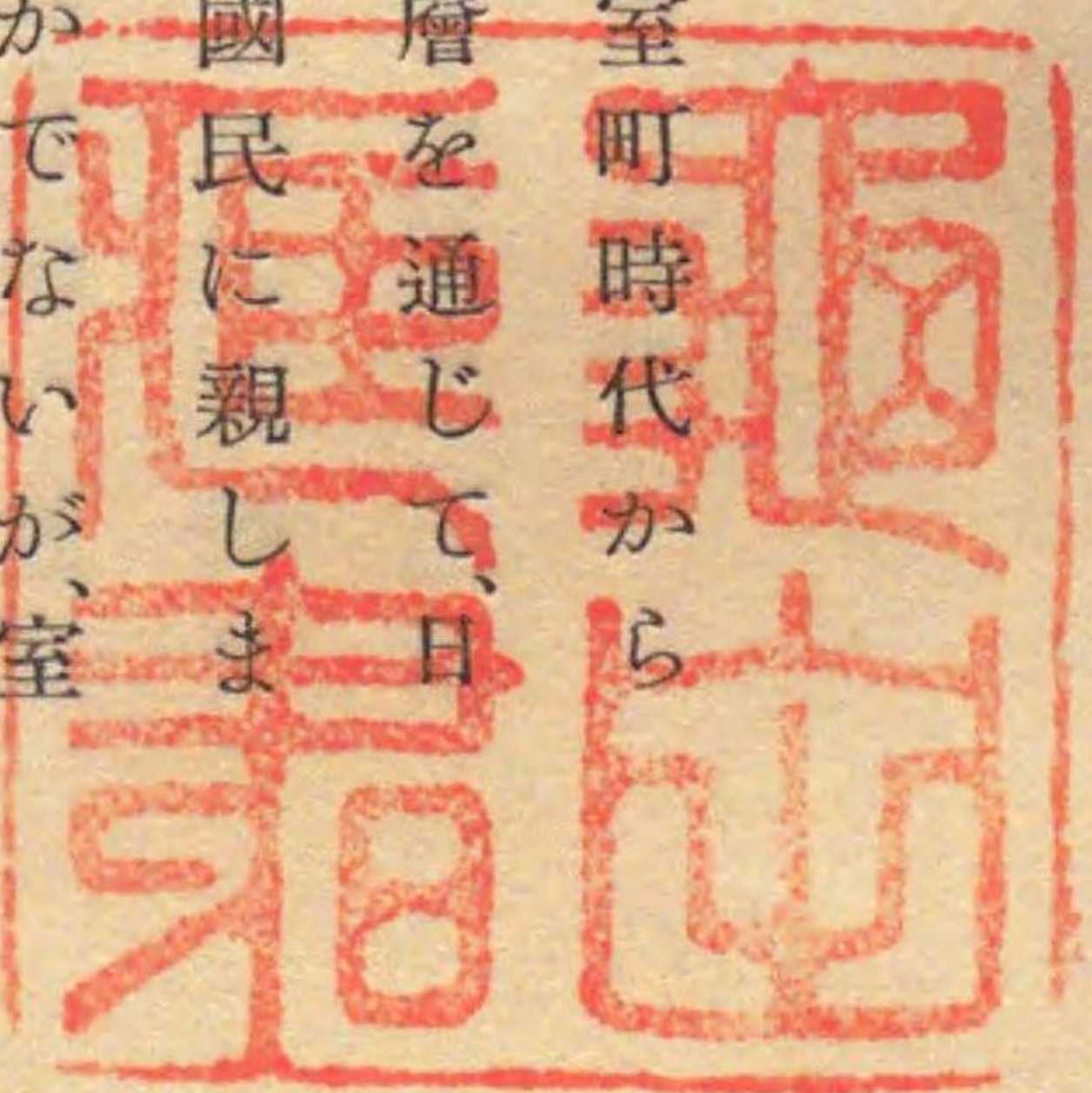
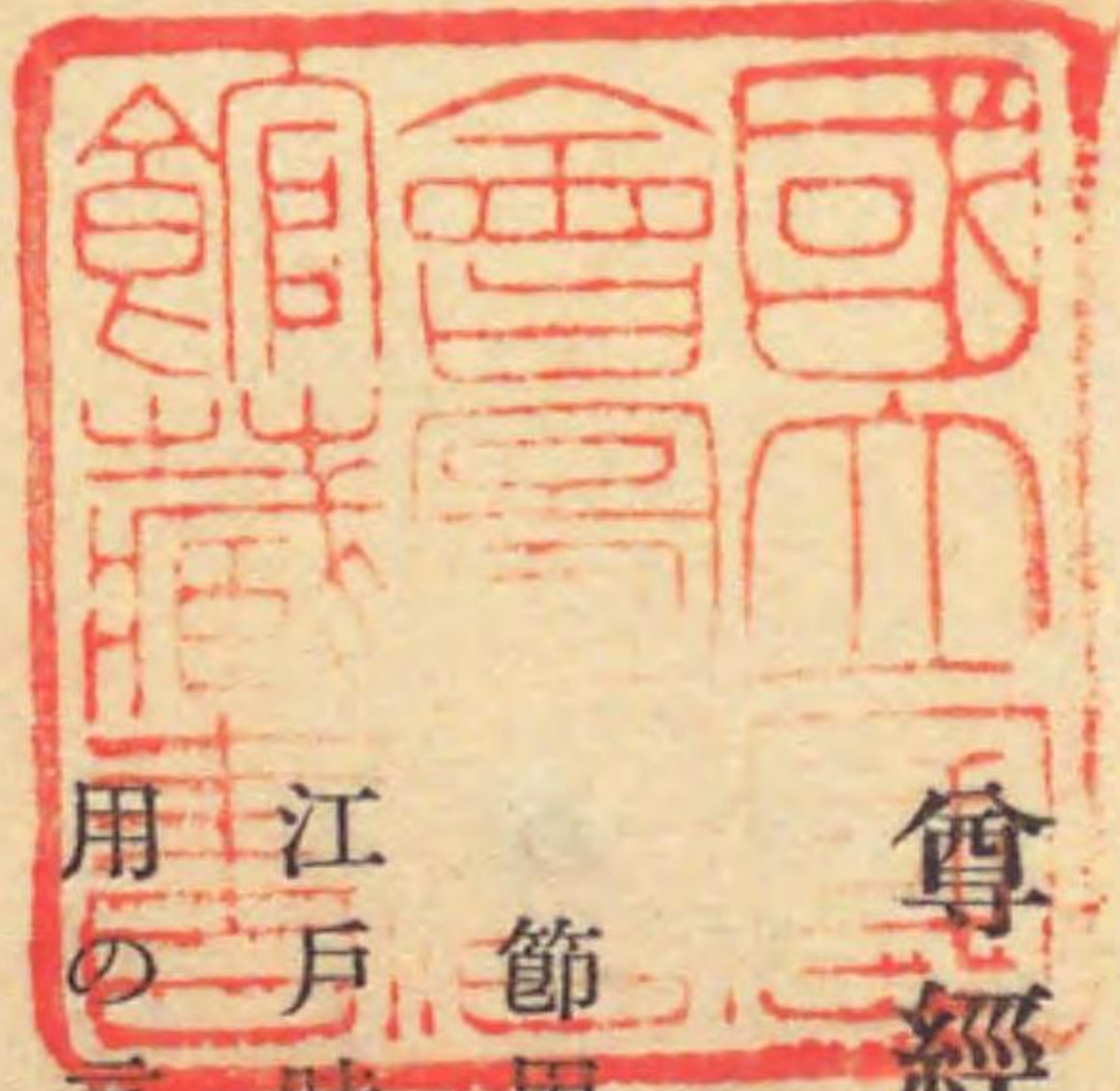
此節用集は石川県金澤市の人稿堂黒本植氏が
昭和二年尊經閣文庫に寄贈せられしものなり
這回本財團に於て複製頒布するに當り東京帝
國大學教授文學博士橋本進吉氏に囑して之れ
が解説を請ひたり之を左に載せ併せて深く其
厚意を謝すと云ふ

育 德 財 團

尊經閣藏古鈔本節用集解説

節用集はいろは引の通俗辭書であつて、室町時代から江戸時代を経て明治に至るまで、社會の各層を通じて、日用の言語文字を知るに便利な辭書として國民に親しま

れて來たものである。その著者は未だ明かでないが、室町中葉の著で、早くから世に行はれて、既に室町時代に於て刊刻せられたものもあり、慶長二年にいたつて易林(夢梅又幽庵とも號す。本願寺の俗臣)の改訂本が印行せられてからは種々の重刊本や増訂本が續々刊行せられて、異本や異版は夥しい數に上るが、その中初期に屬するもの、即ち慶長以前の古本だけでも、現今知られてゐる限りに於て、既に三十五種を超えてをり、その多くは寫本であつて、元和寛永以後の諸本が殆ど皆刊本であるのと大に



趣を異にする。今解説する所の前田侯爵家尊經閣文庫所藏の古鈔本節用集は、この種の古本節用集の一本である。

この本は、縦五寸一分五厘、横四寸三分五厘、厚さ四分餘の大和綴の冊子一帖であつて、表紙は緑がかつた茶色地に一重蔓牡丹唐草の模様ある金欄を用ゐ、見返しは金箔を押した布目紙を用ゐ、白と紫との絹の撚糸を以て上下二個所をとちてある。(以上の装幀は本來のものではなく、後になつて加へたものと思はれる)料紙は強韌な楮紙で、表裏両面に書し、すべて百十張ある。第一張は白紙であるが、その表面左上の隅に左の古筆了佐の極札を題簽のやうに貼つてある。

相國寺横川和尚

山琴

第二張第一行に「節用集」と題し、その下方に「衆白堂藏」の長方形の朱印がある。第二行から本文に入り、以下毎張一面七行に墨書し、第百五張表面第一行にいたつて本文が終り、後四行ばかりの餘白において「節用集終」とある。同じ張の裏面には十二月の異名二種を書し、次の第百六張の最初から京中小路名と題して、京の横堅小路の名を擧げてあるが、この部分は同張裏面第三行で終り、之に直につゞいて十干十二支十二時六律六呂の名、日本國六十餘州(畿内及び諸道の國名州名及び郡數をしるす)及び點畫少異字があつて、第百八張の裏面にいたり、その後二張の白紙があつて、卷が終つてゐる。この本文の後の附録の部分は、すべて細字で一面十四行に書いてある。

この本の本文は全部一筆で、到る處朱で加へた句讀點や符號の類も亦同筆と思はれる。然るに附録の部分は、

京中小路名だけは明かに本文と同筆であつて、その上本文と同じく朱で點や符號が加へてあるが、その他の部分は文字も本文とは異筆のやうに思はれ、行の高さも本文及び京中小路名よりは著しく高く、朱も全く加へてない。想ふに、この本の附録は、もと京中小路名ばかりであつたのを、後にその前後の餘白に、その他のものを書き加へたのであらう。(これ等の附録と同筆の書入は本文中にもある。即ち七部官名門全部がそれであつて、これにも朱は加へてない)

この本の筆者並に書寫年代については、本書の中に何等の記もないが、第一張に貼附した極札によれば、古筆了佐は相國寺横川和尚の筆と鑑定してゐるのである。横川名は景三、南禪寺の僧であつて詩に巧であつた。安國寺に小補庵を作つて居り、文明三年將軍義政の請によつ

て等持寺に住し、ついで相國寺に遷る。長享元年更に南禪寺に移り、明應二年十一月十七日六十五歳で示寂した。この本を横川の筆とするのはどんな根據があるか未だわからないが、書風字體等から見れば、禪僧の筆らしく、その時代も、應仁文明の頃か遅くも享祿天文を下らざるものとおもはれる。さすれば、この本は現存の節用集中では書寫年代の最古いものの一つである。

この本は金澤の儒者黒本植氏(稼堂と號し、衆白堂と稱す。昭和十一年春歿、壽八十歳)の舊藏本であつて、昭和二年、同氏から前田侯爵家の尊經閣文庫に寄贈したものである。本書は白木の二重の箱に入れてあるが、内箱は古く、外箱は稍新しい。内箱には蓋の上に

相國寺横川和尚筆

節用集

古筆了佐札有

と墨書し、蓋の裏には中央に

千本閣摩堂の普賢象を

見に行かれし相國寺横川和

尙か筆なり

と墨書した白紙を押し、右下の隅に「衆白堂記」の文字ある圓形の朱印を捺してあり、内箱の底の内面にも同じ「衆白堂記」の印がある。外箱には、蓋の上の中央に

相國寺横川和尙筆

節用集

古筆

了佐極

左下に

衆白堂藏

と墨書し、右下に「昭和二年春黒本植寄貽」と書した白紙が貼つてある。

本書は、黒本氏が福岡で入手したものであるといふことであるが、それ以前の傳來については詳でない。本解

説の筆者は大正三四年の頃、文學博士上田萬年先生指導の下に、古本節用集の諸本について研究し、その結果を「古本節用集の研究」と題して東京帝國大學文科大学紀要第二(大正五年三月刊)に発表した。その時はこの本はまだ世に知られてゐなかつた。大正十年五月、和田維四郎氏追悼の爲、辭書類の展覽會が京都府立圖書館に催された時、はじめて此の書の存する事を知つたのであるが、多分これがこの書の學界に知られた最初であつたであらう。

この書は今、前田侯爵家の藏に歸したが、同家には、別に以前から藏せられてゐる古本節用集の一本がある。縦九寸一分横七寸一分の大形の袋綴の冊子一冊で、天正末年の書寫本と認められる。この本を前記の「古本節用集の研究」に於て「前田本」と名づけたから、これと區別する爲に、今解説する所の本を、その舊藏者の名によつて黒本

本と名づける。

この本は、他の古本節用集の諸本と同じく、いろは引の辭書であつて、まづ「伊」「路」「波」等の部を立て、一々の部の中に更に「天地」「時節」「草木」以下の門を立てて、語を分ち收めてゐる。さうして各部の名は萬葉假名を以て標して之に一行を興へ、門の名は欄上に小字で標出して門がかはる毎に行を改めてゐる。「ゐ」「お」「ゑ」の三部はその名を標出せず、そのあるべき處の欄上に、それ／＼井在前伊「越在前遠」「見前惠」と標して、語は之と同音なる「い」「を」「え」の三部に併せ收めてある。門は部によつて多少があるが、諸部にあるものを合せて十四ある。即ち

天地 時節 草木 光色 人倫 官名 人名
支體 畜類 財寶 食物 衣服 數量 言語

この中「光色」はミ部以外にはなく、「食物」はカ部に重出して

ある。門名も部によつて多少の差があつて、ロ部とニ部には畜類を畜生とし、ハツフの三部には官名を官とし、ヨ部には時節を時とし、ケフシヒセの五部には食物を飲食としてゐる。又、ユメの二部には食物衣服の二門を併せて食服門としてゐる。各部に於ける門の順序は、右に擧げた門名の順序に一致するものも多いが、しかし之と異なる所のあるものも少くない。

語は、本來の國語もまた漢語もすべて漢字で書いて、その右傍に片假名でよみ方を附してある。語義を註せぬものも多いが、漢文で意義や來歴を註し又は異體字などを示したものもある。

次にこの黒本本を他の古本節用集の諸本と比較して、この本がこれ等の諸本中如何なる位置を占めるかを考へて見よう。

筆者がこれまで見る事を得た古本節用集は、その巻頭なるイ部天地(又は乾坤門)が「印度」といふ語ではじまるか、「伊勢」ではじまるか又は「乾」ではじまるかによつて、印度本、伊勢本、乾本の三種にわけける事が出来るのであるが、黒本本は「印度」にはじまるもので、即ち印度本に屬する。印度本はまた、弘治二年本類、永祿二年本類、及び枳園本の三類にわかれるが、その内、枳園本は、永祿二年本類に屬する一本と、伊勢本中の一本とを併せて出来たもので、純粹の印度本ではない。印度本の特徴は、巻數は一卷で(但し冊數はわかれてゐるものもある。又枳園本は二卷であるが、これは伊勢本に倣つたものである)、「る」「お」「る」の三部なく、門の數は弘治二年本類は十五門、永祿二年本類は十三門又は十四門、枳園本は十四門である。これ等の點に於ても、黒本本は印度本の特徴を有するが、門數から見ると、そ

の中で永祿二年本類に近いやうであるが、門名について見ると、永祿二年本類の諸本に通じて存するのは、

天地 時節 草木 人倫 人名 官名 支體
畜類 財寶 食物 樂名 言語 數量

の十三門で、或本には之に異名門が加はつて十四門となつてゐるのであつて、黒本本と較べると、樂名(或本では異名も)だけ多く、且つ黒本本にある衣服光色の二門が無い。しかるに弘治二年本類は何れも十五門であるが、諸本に共通のものは十四門で、本によつて病名か又は海藻の一門が加はつてゐるのである。さうして、その共通の十四門は、正に黒本本の十四門に一致する。さすれば黒本本は弘治二年本類に屬するものである。

弘治二年本類に屬するものとしては

弘治二年本

南葵文庫舊藏、東京帝國大學藏

弘治二年本別本 東京帝國大學圖書館舊藏(燒失)

永祿十一年本 水戸彰考館藏

圖書寮零本 宮内省圖書寮御藏

和漢通用集 黒川眞道氏舊藏

の諸本がある。この内、弘治二年別本は弘治二年本を謄寫したもので、内容は弘治二年本と全く同一であるが、その他の諸本は、多少の差異があつて、それ／＼特徴をもつてゐる。まづ門名に於て、弘治二年本永祿十一年本及び圖書寮零本には病名があり、和漢通用集には病名がなく、その代りに他に無い海藻がある。黒本本は病名も海藻も無い點で、その何れとも一致しないが、光色門がミ部にしか無い事は和漢通用集と一致し、他の諸本とは一致しない。和漢通用集の海藻門は卜部にのみあつて、草木門の次に位し、「鶏冠」^{トツサカ}、「毒椋」^{ドクマクリ}の二語を收めてゐるが、黒本本に

はこの二語は卜部草木門の最後にあつて、何れも下に「海藻」と註してある。和漢通用集は、黒本本のやうな卜部草木門の最後の二語だけを誤つて別の門として之に海藻と標したのではあるまいか。もし果してさうであるならば、和漢通用集も本來は海藻門なく、すべて十四門であつて、黒本本と一致するのである。

次に所收の語について見るに、弘治二年本類の中、弘治二年本と永祿十一年本は時に多少の出入はあるが、大概相等しいのに対して、圖書寮零本と和漢通用集は所收の語は概して少い。さうして圖書寮零本と和漢通用集の間にも一二語の出入があるが、通用集の方が少い場合が多い。黒本本は大概圖書寮零本や和漢通用集に同じく、ことに通用集の方に近いやうである。

次に附録には、和漢通用集以外の諸本は甚多くの事項

を収めてゐるが、和漢通用集の附録はこれ等に比して著しく少く、

日本之異名

日本六十餘州受領之高下並片名同郡數事

歌書數事

洛中横小路及び豎小路

名乗抄

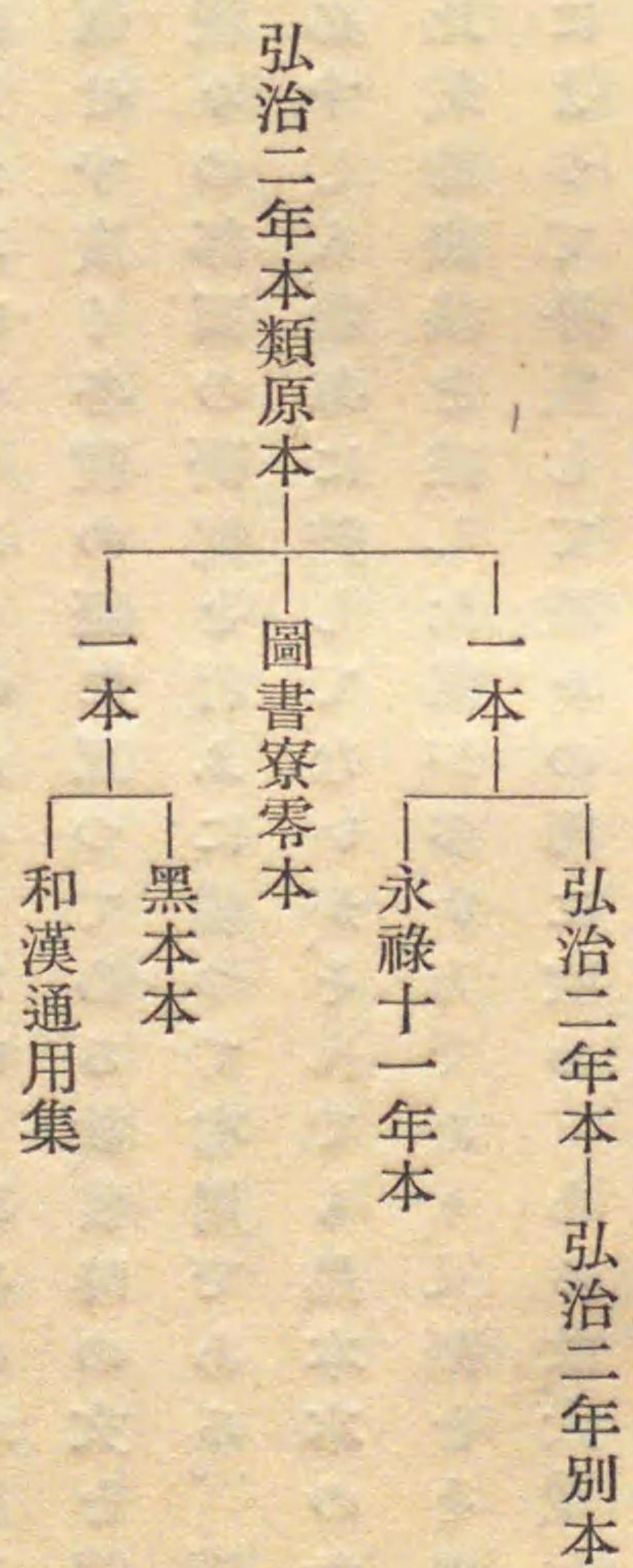
の五種だけであり、中にも日本之異名と歌書數事の二つは、他の如何なる本にも見えず、この本に於て加へたとおもはれるものである。黒本本は、今の形では、相當多くの附録があるけれども、前述の如くその多くは後の書入れであつて、本來あつたと思はれるのは京中小路名だけである。かやうに、附録の著しく少いといふ點に於ても、黒本本は和漢通用集に近似してゐるといふ事が出来る。

かやうに黒本本は、重要な諸點に於て和漢通用集と一致し又は類似して、之に近いものである事疑無いが、一々の部について、その門及び所收の語を和漢通用集と比較するに、門數及び門名に於て間々一致しない所もあり、門の順序は通用集は各部皆一樣で亂れた所がないに對して、この本は部によつて違つた所があつて、それが却つて、圖書寮零本や、時には弘治二年本、永祿十一年本などに一致する場合がある。各部各門所收の語も、大體和漢通用集と一致し、間々一二の出入があるに過ぎないが、語の順序は一致しない所が少くない。和漢通用集は、すべての點に於て後に整理を加へたものと考へられる故、その根源となつた本に於ては、却つて黒本本に一致し又は近似する所が多かつたのではあるまいかとおもはれる。

筆者の研究によれば、弘治二年本類の原本となつた本

に於ては、所收の語は大體圖書寮零本又は和漢通用集に近かつたのであつて、弘治二年本及び永祿十一年本は之に多くの語を補つたもののやうであり、各部に於ける門の有様は、圖書寮零本や弘治二年本などの方が原本に近いものとおもはれるのであつて、概していへば、圖書寮零本が原本の面目を残してゐる所が多いやうに考へられる。然るに圖書寮零本は、その前半が缺けてゐるのであるが、黒本本は大體に於て和漢通用集に近いけれども、それよりも更に原本に近い點があつて、しかも全卷完備してゐるから、圖書寮零本と共に弘治二年本類原本の状態を考へるには缺くべからざるものである。

以上述べた所によつて、弘治二年本類に屬する諸本の系統上の關係を考へると、略次の如くであらう。



弘治二年本類以外の印度本の中、枳園本は永祿二年本類の一本と伊勢本の一本とを併せたもの、永祿二年本類の原本は弘治二年本類の原本に近い一本から出たものと考へられる。又乾本は、弘治二年本類に屬する、和漢通用集に近い一本に改訂増補を加へたもののやうに思はれる。(委しくは「古本節用集の研究」を参照せられたい)さすれば和漢通用集に近く、それよりも更に弘治二年本類の原本の面目を多く残してゐると思はれる黒本本は、印

度本、乾本などと根源に於て淺からぬ關係があるといふべきであり、節用集の最初の原本の状態を推定するに當つて一の有力なる資料となるものである。

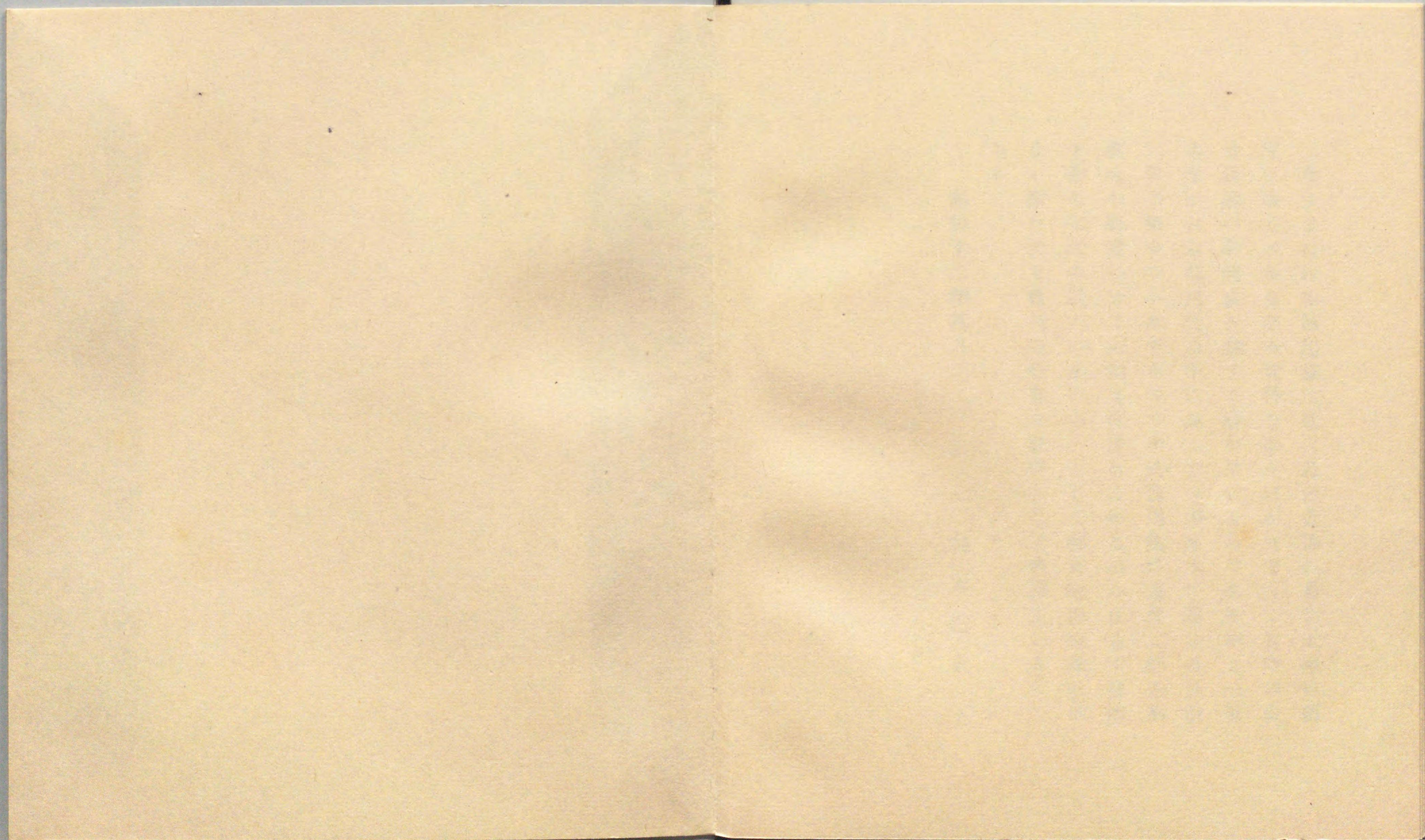
節用集は、書簡や文書に常に用ゐる語を集めたもので、語の意味を教へるよりも、寧ろ語を如何なる文字(漢字)で書くべきかを教へるのを主としたものと思はれる。それ故、古本節用集には室町時代に普通に用ゐられた俗語の類を多く收めてあるのであつて、鎌倉時代以前の辭書類には見えないやうなものが少くない。事物の名目のみ偏せず、廣く各種の語に亙つてゐる故、當時の文を讀み又種々の部面の研究を行ふに當つて有用である。語義は必ずしも語毎に註してないが、それでも黒本本の如きは比載的語義を註した處が多い方であり、又語をその意味によつて分類して種々の門に收めてある故、大體如何

なる種類に屬する語であるかが明かであり、その上、語はすべて漢字で書いてあるのであつて、中には意味に關係なき宛字を用ゐたものもあるが、大部分は漢字をその意義に隨つて用ゐたものである故、多くは漢字によつて語義を知り、又は語源を明かにする事が出来るのである。又漢字に附した假名は、漢字をひき出す爲のものであらうが、實際に於て漢字の讀み方(その語の發音)を示すものであつて、その讀み方は、必ずしも後世のものとは一致せず、殊に清濁を異にするものが少くないが、黒本本の如きは、濁點を委しく加へてあるので、當時の讀み方を確實に知る事が出来るのである。また、その假名の用法の調査によつて、當時の假名遣の實際を明かにし、當時幾何の音を聞きわけ書きわけてゐたかを知る事が出来るのであつて、國語音韻の研究にも有力な基礎となるのである。

要するに古本節用集は、近古乃至近世の言語文字の研究に缺くべからざる資料であるばかりでなく、當時の社會諸般の研究にも益する所が多いものであるが、この黒本本は古本節用集の中に在つては印度本に屬する弘治二年本類中の一本であつて和漢通用集に最近く、節用集自身の研究に於て大切な位置を占めるのみならず、諸本中、書寫年代の最古いものの一として、轉寫の誤の比較的少い點に於て諸種の研究の資料として價值多いものである。

昭和十二年八月

橋本進吉



3
216
箱